

ある違和感

年が明け、帰郷した生徒達の浮付きが収まり始めた頃、スミス・ハウスには低く垂れ込める始める暗雲があった。

スミス・ハウスは、三年前に寮旗を獲得して以来、成績が低迷を続けている。今一步、という所で大量得点の機会を逃しているのだ。来月、二月の終わりには、謝肉祭に因んだボールルームダンスの大会がある。この大きな行事で一気に高得点を目指し、上位に食い込みたいスミス・ハウスの彼等だが……その気鬱は晴れない。

この大会、当日は上級第六学年の全生徒が正装し、寮毎に大ホールで日頃の成果を発表する。この時は五〜六分程のワルツを男性パート、女性パート交互に踊る。そして、全ての学生が寮毎の発表を済ませた後、最後に寮代表のペアによるダンスの審査があるのだ。もちろん審査の対象は男性パートの生徒だが、女性パートに同等の技量が無くても美しいダンスなど望めない。また、やはりイベント要素の強い大会の事、美しいパートナーであるに越したことは無いし、ダンスは審査員の注目を引いてこそ得点が出来るというものだ。クリスマス休暇明け早々に、各寮は女性パートを務める下級生の選定に走り出す。そして暗黙のルールで、女性パートは第四学年の生徒の中から上級生の指名で決まる事となっていた。

第六学年のアーサー・マシュー、ウォルター・モーペリー、ウィリアム・リビンコットは、そのスミス・ハウスの寮生の中でも特に鬱々としている者達と言えよう。がつしりとした体格のアーサー・マシューの手には、一枚の紙が握りしめられていた。そこには上級第六学年が投票で決めた女性パートを担うべき学生達のリストがあった。一応、数名の名前が上げられていたが、それは建前で、アーサー・マシュー等は、第一位に指名された生徒からの承諾を得なければならぬ。上級生の指示は絶対だ。だが……三人は、重い足取りで寮の二階、去年まで物置部屋であった扉をノックした。

ノックに扉を開けたアイオリア・エインズワースはぎゅつと眉間に皺を寄せた。今日で彼らの顔を見るのは何日目か。恐らくそろそろ五本の指を越えるだろう。そして、扉の向こうに立つ上級生の顔色は日に日に陰鬱になっていく。

「……ミロ、と」

アイオリアは、後ろを振り返って顎をしゃくった。すると、ベッドの上で胡坐し数冊の本を膝の上や寝台の上を広げているミロ・フェアファックスが、ぐるりと振り返った。その顔にはアイオリア・エインズワースより更に露骨に「不愉快」との文字が表示されていた。

「何度来てもらっても答えは同じです」

今日で五回目の訪問者に向かって、ミロは低く固い声で彼らの訪問の意図を拒絶した。

「でも…フエアファックス…これは最上級生年で決まった希望だし…」

「違う人の名前だつて載つてるでしょう？ オレは断つて居るんですから、違う人に当たつて下さい」

「だけど、お前が群を抜いて票を集めているんだ」

「俺達だつてお前に我俣言われて迷惑してるんだ」

「な？ 寮の優勝がかかてるんだからさあ…」

「寮の優勝は、寮生全員にかかてるんだ。オレだけじゃない」

尖つたミロの声が上級生の声を遮つた。強い視線を容赦なく叩き込まれた三人の上級生達は、一様にムツとして声を荒らげた。アイオリア・エインスワースは、これから始まる展開に溜息を付いて壁に視線を反らせた。

「フエアファックス！ 少しは自分の立場を弁えろっ…！」

痺れを切らしたウォルター・モーペリーが、一言鋭くミロ・フエアファックスを糾弾した。

それにミロはギリッと齒軋りの音で答えると、両手を寝台に着き勢よく立ち上がろうとした。すると、それに、ミロ！と小さく鋭い声がかかった。

「協調性とか、雰囲気とか…あるだろうが！ 自分の事ばかり考えて…！ 回りの状況を見てみる！ お前がいつまでも我俣言つて引き受けないから、寮全体の雰囲気まで最悪じゃないか！ 子供の我俣も大概にしろ！」

伸ばした腕をそのままに、動きを止めていたミロの顔がぱつと朱に染まった。ミロの下でベッドのスプリングが音を立て

て軋み、それをバネにしてロケットの様に飛び出すかに見えるミロの動きが、先程もミロの動きを止めた丸みのある静かな声で遮られた。

「先輩、もし、最上級生の先輩方が承知して下さるのなら、その役、僕がやります」

アイオリアはギョツとして声の方を振り返つた。そこには、静かに小さな窓の前に立ち、上級生を見上げているカミュ・ルーファス・パロウの姿があつた。表情は逆光で定かには見えない。

一方、徹底的に三人の上級生を遣り込めてやろうと全身で意気込んでいたミロも、呆然とした体で声の主を見詰めていた。ミロとしては、女装をするかしないかという問題よりも、その向こうに有る思惑に我慢がならず、頑なに首を縦に振らなかつたという、彼なりの主張がある。そもそも、誰も自分から女装しますなどと言う人間は居ないのだ。誰もが自分にそんな災難が降つて来ない事を望んでミロを押ししたり、ハナから対象外と思つている生徒などは無責任に引き受けちまえ、などとミロを攻め立てる。ミロは、そこが気に食わない。

結局嫌な役を押し付けあつて居る。

その自覚をされないままに、誰が引き受けてやるものかと、それは強く決心していたので、誰かが立候補するなど考えてもいなかったし、その上ミロとしては、人一倍男気のある、上背もそれなりのこの赤毛の少年が、まるでなんでも無い事のように申し出た現実が俄には信じがたかつた。

アイオリアも、白目まで綺麗に丸く見開いたミロが、カミュを振り仰いでいるのを視界に納めながら暫し思考が停止していた。戸口に立つたままの上級生達も固まり、何秒経つた頃から、ようやくウォルター・モーベリーが何度か口を湿らせた後に言った。

「分かった。ルーファスが立候補したと先輩に伝えてみる。結果は直ぐに君に伝える」

そして、彼等はミロに一瞥もくれず身を翻して去った。それを確認すると、カミュは静かに自分のベッドの横にある机に腰掛け、レポートの続きをしようとペンを手に取った。アイオリアは、大きく鼻から息を吐くと、ゴロリと寝台に横になる。そして、ミロだけが、尚も暫く石のように固まってカミュを凝と見詰めていたが、そのうち唇をきゅつと引き結ぶとベッドに立て掛けている黒いバイオリンケースを手にして部屋を出て行った。

扉の閉まる音を聞いて、アイオリアは横にあつた雑誌を適当に開いて、顔の上に乗せ、目を閉じた。

新年からこちら、アイオリア・ジャステイン・エインズワースは何だか体がむずむずして仕方が無かつた。ヌスピトハギの種が手の届かない背中にまでくっついてしまったような、目の端を小さな羽虫がひらりひらりと飛びかかっているような、なんとも落ち着かない感覚が続いているのだ。

事の始まりは、こうだ。冬期休暇中に、二学年上の兄、ア

イオロス・ヴィンセント・エインズワースが、オフロードタイプの単車で交通事故を起こし、未だに学校を休学している。

一月四日未明、エインズワース家は一本の電話で叩き起こされた。それは兄からの電話で、交通事故を起こして市内の救急病院に居る、との事だった。父の運転する車で母と共に病院に駆けつけると、薄暗いロビーの長椅子に、一人座っている兄の姿があつた。左足のズボンが膝まで捲くられ、パイプのようなものを漆木代わりに足に縛り付けていた。弁護士である父が兄に事の次第を尋ねると、兄は普段と変わらない口調で簡潔に事のあらましを告げた。

未明、氷点下の気温の中を一人で単車を飛ばしていたアイオロスは、交差点に差し掛かつた。その時、右側から猛スピードで一台の車輦が信号を無視して交差点に進入した。そして、もう一人、酔つて足元の寛束無い女性がその車に接触、車はそのままアイオロスの脇を擦り抜けて逃走するという一件に遭遇したのだ。

アイオロスは、暴走車輦はなんとかやり過ごせたものの、自身も規定スピードを上回り(この当たり、アイオロスは明言を避けたが、両親共々、アイオリアは兄がかなりのスピードを出して走行していたと考えている)跳ね飛ばされて路上に倒れた女性までは避け切れず、横転。

その後、幸い女性には意識があつたので、救急車を待つより自分で搬送した方が早いと、後ろに乗せてこの救急病院まで移動。医者を捲くし立てて女性の方は頭の精密検査に回さ

せたが、自身はまだ処置してもらっておらず、取り敢えず骨に異常を覚えるので受付に頼んで病院の備品であるスチールの棒(スチール・ラックの一部品だと思われる)を一本拝借して患部を固定している。

と、以上をすらすらと述べた。父は、ぎつとアイオロスを見下ろし厳しく彼の目を見つめていたが、やがて肩の力を抜くと、

「逃げた車輛の番号は覚えているのか」

と、問うた。アイオロスはしれつと番号を口にして「よろしく」と言うようにやりと笑った。

まったく！

と、アイオリアは心の中で叫んだ。この人の弟をやつて十数年。どんなにその存在が鬱陶しく思え、腹立つ事が起こつても、結局最後にはいつだつて適わないと思わせるのだから堪らない。身体能力も身長と等しく平均から抜きん出ている兄が事故と聞いて、皮膚が栗立ち、ずつと拳を握り締めていたアイオリアは、漸くこのいつもの兄の笑顔を見て肩から力が抜けるのを感じた。それなりに痛みはあるだろうに、それでもこの兄は笑つていられるのだ、と。腹立ちと安心を覚えた。結局、四回の問診の後、やつとレントゲンの結果と整骨医の診断が下つて、アイオロスはその日一日だけ病院に留まつた。異変を覚えた脛骨には、すっぽりと斜めに痺が入っていた。医師も感心する程綺麗な亀裂だった。診断結果は全治七週間と診断が下つたが、治療としてはギプスで患部を固定するす

るしかなく、処置としては痛みがあるようであれば薬を処方する、という至つて簡素なものだった。

そして、翌日、自主的に退院し帰宅した兄の様子に、微かな違和感を覚えた事がアイオリアの消化不良の始まりになった。それ以前からだったのかもしれないが、アイオロスはバイトで殆ど家に居なかつたのでアイオリアには定かではないのだが、ただ、その事故の翌日から、久々に兄を家の中で観察してみると、何かが違うのだ。昔から年より大人びて見える兄だが、それは極めて明るい感じのするもので、鬱屈のない伸びやかなものだった。それが、兄の遮蔽の合間から、時々暗く人を寄せ付けない拒絶の意思が漏れてくるのだ。

明日から新学期、という日。荷物の仕度をしていたアイオリアはアイオロスから声を掛けられた。学校に戻つたらサガ・チエトウインドには絶対に見舞いなどに来るな、と言つておけ、という言葉だった。いちいちこんな怪我で見舞いなんてされて堪るか、と照れ隠しのように嘯いたアイオロスは、一見いつものアイオロスと同じだったかもしれない。けれど、最後に

「いいか、絶対に来るな、と伝えとけよ」

と、言つた彼の目は形容し難い力を秘めていて、アイオリアは浮かんた微かな疑問を口にすることも出来なかつた。

そして帰寮した晩に、食堂でそつとサガ・チエトウインドにアイオリアは声を掛けられた。ミロや他の同級生との談笑中だった事を気にしてだろう。済まなさそうに、小さな微笑

とともに謝罪の言葉を述べてから、
「アイオロスとは一緒じゃなかったのかい？」

と訪ねられ、アイオリアは簡単にこの冬休みの間に起こった顛末をこの静かなけれど凛とした上級生に告げた。すると、もちろんミロやカミュなども驚愕したが、この兄と入学以来の友人で、今年は二人部屋の相棒でもある上級生は一転真つ青になつて息を呑んだ。

「事故つて……！ そんな、全治七週間つて一体……」

「あ、いや、そんな大した怪我じゃないんです。えーつと、バイクですつ転んで脛の骨に痺を入れた程度で。兄貴もケロつとして、レントゲン見ながら医者も大笑いしてたくらいだから……」

「頭は打つていないのか？ 自動二輪の事故だろう？ 彼が免許を取っていたとは知らなかつたけれど……あの彼が二ヶ月の怪我だなんて……病院は何処に？」

青ざめたというより、白に近い顔色のまま、焦りや心配が滲み出た表情で、サガ・チエトウィンドはアイオリアに訪ねた。それは、必死とも言ひ換える事が出来るほどの真剣さで、アイオリアは返つて自分の方に焦せりを覚え、うろたえた。

「いや、入院なんて、当日病院に泊りただけで後は家でゴロゴロして暇そうだけで、ピンピンしてるし、頭も打つてなくて、本当に左足だけの怪我なんで……あの、心配しないで下さい」

立ち上がつて兄よりは低いものの、アイオリアよりは上背

のあるサガ・チエトウィンドに両手を振つて彼の心配を否定した。

「学校に来ないのも、ギブスしてる足で動き回るのが面倒なのと……多分、普段は自分が人の事からかうの楽しんでるから、それが今度は自分に降りかかつてくるのを避けてるだけだと思ひますよ」

サガ・チエトウィンドは、漸くほつと息を吐き出し言つた。「それだけならいいのだけれど……有難う安心したよ。それじゃあ、今度の週末にお見舞いに行つてもいいのかな？」

少し、血の気の戻つてきた顔を見上げながら、アイオリアは咄嗟に兄アイオロスの眼差しを思い出し言つた。

「いや、兄貴、誰も見舞いには来るなつて……」

「え……どうして？」

「いや、やつぱ極まりが悪いんじゃないかな……」

笑いで誤魔化しながらアイオリアが答えると、サガ・チエトウィンドは一瞬瞠目し、そしてその瞳を伏せた。そして、もう一度アイオリアを見ると、丁寧な礼を言い、彼らの食卓から立ち去つた。

ほつと胸を撫で下ろしたアイオリアに、小さな疑問が残つた。何故兄は特別にサガ・チエトウィンドの訪問を頑なに拒んだのか。そして、目に残るサガチエトウィンドの蒼白になった顔人間の顔色というのはこんな風に一瞬で、音を立てるようになられるものなのだと、初めて知つた。

自分自身、訳の分からない慌て方をしてしまつて肩に力が

入った。疲労感を感じて着席しなおすと、耳に同室の音が届く。「いいなあ……オレもバイク乗りたいなあ……」

「ミロ：今はそういう話じゃないだろう……」

「そう？ でも、もしオレが取つたら、オレの方がカミュより早く免許取れるから、乗せてやるよ。」

テーブルの向こうから聞こえてきた短いやり取り。カミュとミロ、僅かに脱力しつつも、このいつものと変わらない彼らのやり取りに、アイオリアは心からほっとした。確かにこの時は、いつもの彼らだとアイオリアには思えたのだ。

第四学年になって、アイオリアから見ると、ミロは一層カミュと一緒にいる時間が増えている。もともと課外活動のオーケストラの部員として昨年から親しかつた事に加え、今年からは相部屋、選択音楽の授業でもペアを組むようになったからだろ。

アイオリアとしては、昨年一年、自分とタッグを組んでミロのお守りしてきたように感じるカミュと同室というのは心強かつたし、ミロがカミュに懐く分には自分の負担が軽くなるかと無条件に歓迎していた。だが、それもある日、ポール・フェニックス・リッジウェイが、カミュに十曜の合奏の約束をしているミロを強い視線に見詰めている事に気付くまでの事だつた。

ポールは、この学校に入学するまで地元のクワイヤでカミュと共に歌っていた。その気安さから、昨年は殆どカミュにベツ

タリといつていい程くつついていたのだ。それが、部屋が別れ、ポールの背がぐんぐんと伸びていくに連れて、彼のそんな子供っぽいカミュに対する独占欲は見られなくなり、アイオリア自身、この時のポールの顔を見をまで忘れていたくらいだつた。

ポールの視線に気付いた時のアイオリアの気持ちを率直に記すなら、

おいおい……男が男に嫉妬してどうするんだよ……と、いう一言に尽きるだろう。

ミロとカミュは全く気付いていないようだったが、一度目に付くと、何となく気になるもので、気になっていると、余計に見えてきたりもする。

派手にカミュの側にまわりつく事のなくなつたポールだが、密かに食事の時には彼らの声が拾える所に席を取つていりし、実にカミュの側にさり気無くいるのだ。常に賑々しくカミュと居るミロとは対照的に……。全く見事に。

かと言って、ミロが昨年までのポールのようにカミュに付き纏っているわけではない。新人生が入つて彼の体躯に対するコンプレックスは些か減少したのか、以前ほど導火線に引火する回数は減つたし、既にスミス・ハウスではあからさまにミロの容姿を揶う者は居なくなつたので、派手な喧嘩も少なくなつた。ただ、声や表情、身振り手振りが大きいミロと対照的に、実にしつかりと落ち着いて行動するカミュ、この二人が一緒にいると、何かと目に付くのだ。鮮やかな赤